

氏名(生年月日)	河原貞雄
学位の種類	医学博士
学位授与番号	甲第151号
学位授与の日付	昭和40年3月31日
学位授与の要件	医学研究科外科系整形外科学専攻 (学位規則第5条第1項該当)
学位論文題目	正中神経および尺骨神経損傷の予後に対する臨床的研究
論文審査委員	教授 児玉俊夫 教授 砂田輝武 教授 田中早苗

#### 学位論文内容要旨

岡山大学医学部整形外科教室において過去7年間、正中神経および尺骨神経損傷で神経縫合を受け1年以上を経過した患者のうち、46症例、55神経にたいし直接検診し得たのでその術後成績を検討し、次の結果を得た。

1. 手術が受傷後3カ月を過ぎると漸次成績は低下し、6カ月を過ぎると非常に予後不良である。受傷後3～8週の早期2次縫合の成績は特に良好で、むしろ、1次縫合より成績はよい。
2. 年齢は若いほど（特に0～9才）成績良好である。
3. sharp cut injury の成績は良好である。
4. 術前において感染のあった症例はすべて予後不良である。
5. 損傷の高さが中枢に近いほど予後は悪い。
6. 正中神経および尺骨神経が同一の高さで同時に損傷された場合、両神経とも大体同程度の回復を示した。
7. 縫合後1年以上を経過すると知覚の回復と発汗機能の回復が必ずしも一致しなかった。

## 論文審査の結果の要旨

戦時外傷では神経損傷に対する研究も膨大な症例で行われるが、その術者観察者は必ずしも同一人ではない。河原の論文は現広大津下教授の指導によるもので、手術はすべて津下教授がなし、それを津下教授と河原が臨床的に追跡分析したものである。高度な技術を要する神経手術では、かくてこそ真の分析がなし得るわけである。

46症例、55神経についての検査成績および結論としては特に重要なことは

- 1) 受傷後3～8週の早期2次縫合の成績は良好で、1次縫合を行う必要がない。
- 2) 術前において感染のあった症例はすべて予後不良であった。
- 3) 損傷の高さが中枢に近いほど成績は不良であった。

以上の諸点である。この研究は創傷の初期治療が特に大切であることがわかりさらに神経手術の時期、腱手術を合併して行うべきか否かの判定に役立つ。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。